

# 博士論文審査結果の要旨

学位申請者 野 村 麻 由 子

主論文 1 編

Isolation and unnatural death of elderly people in the aging Japanese society.

Science and Justice Dec 12, 2015. Published Ahead-of-Print. <http://dx.doi.org/10.1016/j.scijus.2015.12.003>

## 審 査 結 果 の 要 旨

現代日本はかつてない高齢化社会を迎えた。近年平均寿命は延び高齢化率が上昇する一方で、核家族化と独居高齢者の増加が進んだ。老老介護、介護ストレスによる虐待や殺人、高齢者所在不明問題、死後の年金不正受給など高齢者と家族をとりまく問題が報告されるようになり、行政レベルでもこれらの問題に対して対策が取られるようになってきてはいるが、渦中で不幸にも亡くなる高齢者もいる。このような異状死の中には、犯罪性が否定できず司法解剖されるケースもあり、それらの背景を調査することによりこれらの問題の解決の糸口が探れる可能性がある。

申請者は、本学法医学教室で施行された約 20 年前（1989～1993 年）と最近（2009～2013 年）の高齢者の司法解剖症例について、発見場所、第一発見者、死後経過時間、死亡に至る経緯と死因、独居と同居の別を調査した。最近では発見場所が自宅であったものが多い傾向にあり、独居者で有意に多かった。家庭でおきた異状死に照準を絞るため、今回は自宅で発見されたケースに限定して調査した。20 年前では、独居者の全例で第一発見者は他人であり、死後 3 日以上経過していたケースは約 14%であった。同居者では死後 3 日以上経過していたケースは約 7%であった。独居者、同居者とも死因不詳のケースはなかった。最近では第一発見者は他人であるケースが 20 年前より少なく家族によるものが多い傾向にあったが、死後 3 日以上経過していたケースが独居者で約 50%、同居者でも約 20%あった。救急搬送後に死亡確認されたケースは独居と同居で有意差を認めなかった。死因不詳のケースはそれぞれ約 20%と 30%と 20 年前より有意に多かった。一方で他殺は有意に少なかった。

以上の結果より、死後経過時間の延長と死亡経緯が不明であることが死因をわかりにくくしていると考えられ、それらの背景として核家族化の進行と地域社会が疎遠になったこと、家族間のコミュニケーションや危機対応能力の低下があり、その結果高齢者の危機的状況を早期に発見して救助するなど適切な対応が困難になっている可能性が考えられた。またこのような状況で家庭内での殺人の看過が危惧される。

しかし、高齢者が安心して生活し平和に人生の最期を迎えるために 3 世代同居・大家族で介護、地域社会の活発な交流、家族間の活発なコミュニケーションなどが理想であるが現実には困難であると考えられるため、高齢者の安全確認のための遠隔モニタリング、家族の存否に関わらない福祉職員の頻回な訪問、高齢者の相互扶助のためのグループや住環境の設立等が必要と考えられる。

以上が本論文の要旨であるが、司法解剖の症例の背景から死因推定を困難にしている原因は、地域社会や家族から孤立する高齢者の現状にあることを明らかにした点で医学上価値ある研究と認める。

平成 28 年 4 月 21 日

審査委員 教授 佐 和 貞 治 ㊞

審査委員 教授 太 田 凡 ㊞

審査委員 教授 渡 邊 能 行 ㊞